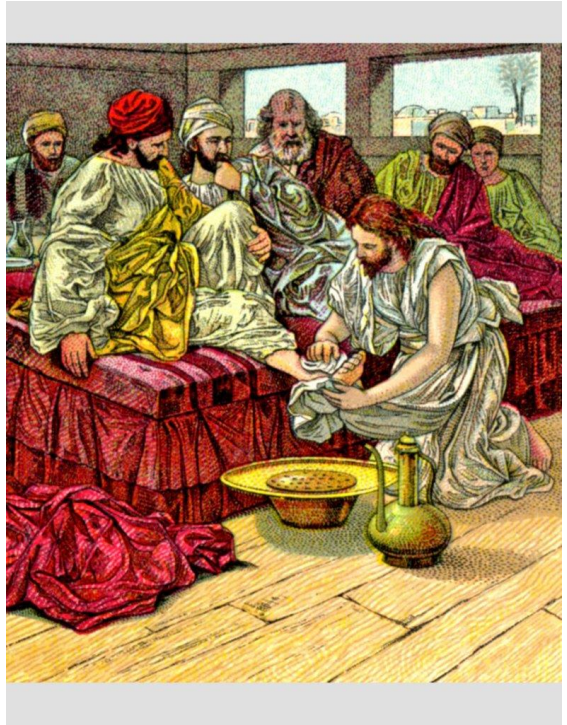

2023年9月10日　説教「一致を保ち」

ピリピ人への手紙2章1～11節

本日は会堂16周年記念礼拝です。今朝は獄中書簡の一つであるピリピ人への手紙から学んでいきましょう。

1．他の人のことも顧みなさい（1~4節）

①御霊の交わり（1節）**「こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、」**

キリストにある「励まし」（パラクレートス）は「勧め」とも「慰め」とも訳せます。逆に「愛の慰め」は「励まし」とも訳せます。「御霊の交わり」は、人との関係というより、その人の御霊との関係を示しています。「愛情とあわれみ」とは、自分から生まれるものではなく、キリストによって与えられる愛情や憐みのことです。1:8には「キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたを慕っているか」と述べその心を表しています。

②心を合わせ（2節）**「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」**

ここでパウロは「私の喜びが満たされるように」と言い、自らの満足を優先しているかのように誤解しやすいですが、獄中にある喜びを述べつつ、あくまでもピリピ教会の人々のことを思っています。パウロが彼らに勧めているのは、「一致を保つ」「同じ愛の心を持つ」「心を合わせる」「志を一つにする」とあって、一つになることです。エペソの教会にも、教会論を伝えるなかで、「御霊の一致を熱心に保ちなさい」（4:3）と勧め、その根拠は神が一つであることであると教えています。

③へりくだって（3～4節）**「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」**

一致を保つために重要なことは、自己中心（党派心とも訳される）や虚栄から何事かを行おうとはしないことです。「へりくだって」は、自我を捨てて、自らがほめられることや良い地位に着くことを求めないことです。そして、「互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。」とは、相手の立場、才覚、人格、地位、外見などに関係なく、その人が神に愛され高価な存在であること（イザヤ書43:4）を認めていくことです。さらに、ここでは自分自身に目を向け、自分のことばかり考えやすい者たちに、「自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい」と勧められるのです。

2．人間と同じようになられ（5～8節）

①そのような心構えで（5節）**あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」**

ピリピの教会の人々の間では、観念や教理上ことではなく、実際に1～4節における勧めが実現することを求めています。そして、その模範は他でもない、イエス・キリストにあると明言します。

②神の御姿である方が（6 節）**「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、」**

ヨハネの福音書 1:1 には「ことば（キリスト）は神であった」とあり、「キリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です」（ローマ 9:5）ともあります。ここには、「神の御姿である方」とありますが、キリストは創造主なる神御自身なのです。即ち、キリストは三位一体なる神の、子なる神であられます。その方が、神のあり方を捨てること、すなわち永遠不変であることを捨てて、有限の世界に来てくだることを受け入れてくださったのです。

③自分を卑しくし（7~8 節）**「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまで従われました。」**

キリストは自分を空しくして、仕える者の姿をとってくださいました。弟子たちの足を洗われた主を思い出してください。キリストは神性を脱ぎ捨て、人間と同じようになってくださったのです。ところが、人間は神に似せて造られた存在ですが、神との約束を破り、罪を持つ存在です。キリストは人間と同じ身体を持ち、同じ生活をする方として来られました。問題は人間と同じように原罪をもっておられたかというと、キリストは、罪を犯すことのない方（Ⅰペテロ 2:22）として生まれ、生きてくださったのです。彼は徹頭徹尾、仕える方として生き、人間としての死をも受け取られました。それも、私たち人間の罪の身代りとして十字架上に死ぬまで従われたのです。

３．すべての口がひざをかがめて告白（9～11 節）

①この方を高く上げ（9 節）**「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」**

キリストは謙遜の極致である方です。なにしろ、神である方が人間のかたちをとられたのです。キリストは十字架の死をお受けになりましたが、それは普通の人間にとっても屈辱でした。また、神なる方なのに陰府にまで下るという恐ろしい事態を経験されました。一番低いところから、神はキリストを高く上げて、すべての名に勝る名を与えられたのです。

②天と地にあるもの（10 節）**「それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、」**

イエス・キリストに与えられた御名は、天においては御使いたちが、地においてはクリスチャンを中心にした者たちが、地下においてはそこに生きる者たちが、すべてがこの方の前にひざをかがめるためでした。それほど大いなる御名が与えられたのは、キリストが謙遜の限りを尽くし、仕える姿をもって歩まれたからでした。

③すべての口が（11 節）**「すべての口が、『イエス・キリストは主である』と告白して、父なる神がほめたえられるためです。」**

キリストの前にひざをかがめ礼拝する者たちは口をそろえて、「イエス・キリストは主です！」と告白します。そして、その告白や賛美は父なる神に届くことになるのです。

《結論》千葉県の一地域にある姉ヶ崎キリスト教会は、この朝に現会堂が与えられてから 16 年が経過したことを記念し、礼拝をささげています。週報の裏ページには出来事の一端を記しました。しかし、教会の営みにおいて、最も肝心なことは、欠かすことなく主日礼拝をささげ、祈祷会で祈りがささげてきたことです。また、聖書の学びがなされ、主にある交わりが成されてきたことも重要です。さらに、宣教活動として、子供達と主を見上げてきたことやチャペルコンサートを行ってきたことも大切なことでありました。

そういうなかで、宣教や交わりの難しさに遭遇してきたこともありました。今ここに学んできたピリピ教会には、ユダヤ主義者の問題（3:2）、誤った完全主義者の問題（3:12~16）などとともに、不一致の問題がありました。パウロは今朝の聖書箇所で、教会の一致に関する勧めと教えをしています。

この書簡を読むにあたっては、パウロがローマの獄中から手紙を記しているということも銘記しておくことが大切です。獄中にあって、教会には一致が必要であることを、彼は強く思わされていたのです。つまり、獄中にあっては、不一致になる以前の、キリスト教信仰を持つこと自体に大きな圧力がかけられていたわけです。しかし、教会にあっては、キリストを見上げることは自由なわけです。それであるのに、不一致があるのは残念です。ともにキリストを学べば、一つになれる土壌があるのです。しかし現実の教会のただ中では、それが見えなくなりやすいのです。だから、パウロはキリスト教会は、一致することが重要であると強調するのです。同じ獄中書簡のエペソ書 4 章、コロサイ書 3 章にも一致が勧められています。

私たちの教会も本当の意味で成長するための鍵は、「一致」です。一つになることが求められています。それもしっかりとした土台の上に立った一致が大切です。これがなければ証しにもなりません。

それでは、そのためにはどうしたら良いでしょうか。一人一人がへりくだることを学ぶことです。それではへりくだるには、どうしたら良いでしょうか。キリストこそがへりくだりの唯一の模範です。なにしろ、神である方が人間のかたちをもってきてくださり、お仕えくださったのです。そして、人が罪から救い出されるために、十字架にのぼってくださったのです。それでは、キリストからへりくだりを学ぶためにはどうしたら良いでしょうか。次の御言葉をともに読みましょう。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしについて来なさい。」（ルカ 9:23）。自分が評価されるかどうかなどはニの次です。キリストが十字架に上られたお心を思い、自らに与えられた十字架を日々に負って、キリストについていくのです。その時にへりくだりの道が開かれてくるのです。プライドが傷つけられた時にも、自分の十字架として受け入れていくことです。

一人一人が、キリストについていき、キリストのへりくだりから学びましょう。人間の力で一致を作ろうとしても無理です。皆が「キリストを主です。」と告白する時に生まれる一致を求めましょう。それが、一人一人の喜びにもつながのです。姉ヶ崎キリスト教会に一致の祝福が豊かにありますように。